

レンズ

連載

六月

を通して

写真・文 高円宮妃久子殿下



ムクドリ 24cm ムクドリ科

モンゴル、ロシア沿海州、中国北部、朝鮮半島や日本で繁殖し、冬期は中国中南部、台湾などで越冬する。国内では全域に見られ、ほぼ留鳥だが、北海道では冬に数が減り、南西諸島を冬に訪れる鳥。ムクドリの仲間はいずれも群れる習性があり、ヨーロッパのホシムクドリは100万羽の集団^{コロニー}を作ることもあるという。



ムクドリの仲間は世界中に生息し、
ルックスもさまざま。日本のムクドリは
黒色で顔の周りが白、嘴と足が
オレンジとなかなかおしやれな色みである。
写真の手前がメス、奥がオス。
「椋の木の実」を食べることから
名前が付いたと聞いていたが、
「群来鳥（むれきどり）」という説も
あるらしい。公園など開けたところを好み、
我が家の庭などにも数羽で降り立って、
虫を食べる姿をよく見かける。

群れるムクドリ

共存の形

写真文 高円宮妃久子

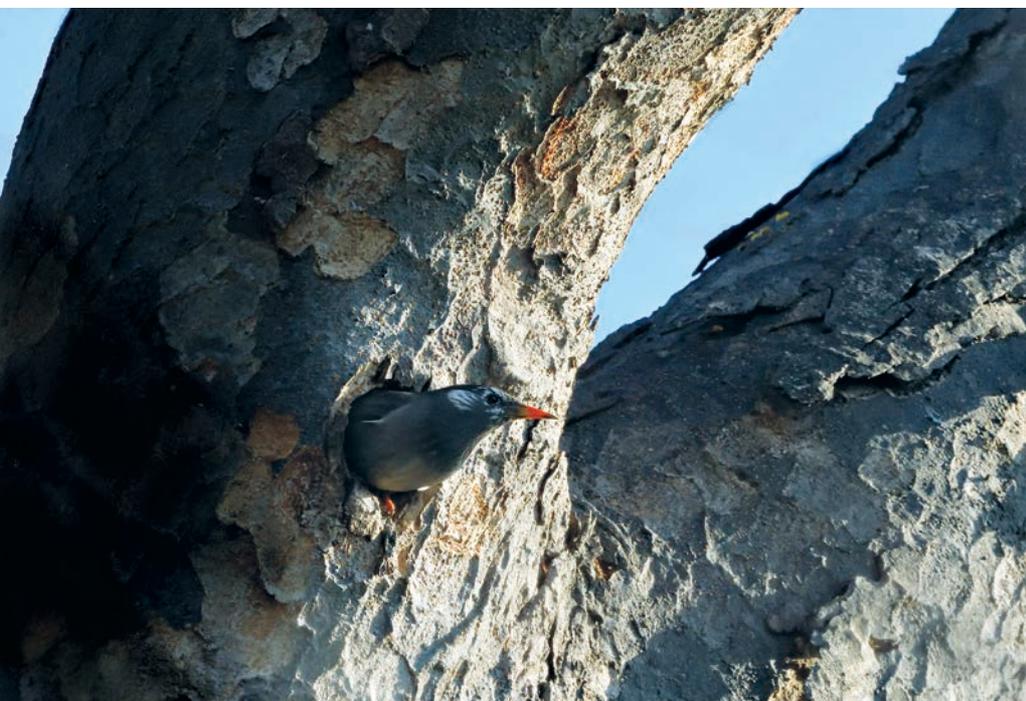
どの鳥の写真を、いつ、どのようにご覧に入れるか、
悩むことがございます。渡ってくる季節が決まってい
る鳥などは決めやすいのですが、ムクドリは一年中見
られる留鳥。あまり考え過ぎずに、今回ご紹介するこ
とにいたしました。愛用している歳時記には「椋鳥」
は「秋の季語、益鳥である」と書いてあるのですが、
最近、ムクドリは街の「嫌われ者」となっており、害
鳥扱いされています。その成り行きと彼らとの理想的
な共存の在り方について、書かせていただきたいと思
います。

ムクドリは古くから人の生活と密接に関わってきた
身近な鳥です。春から夏、秋には主に昆虫やミミズな
どを主食とし、農耕地で害虫を食べてくれる益鳥です。
秋の終わりから冬にかけて、昆虫などの餌が得られな
くなるころに、果実が主食となります。「柿やりんご
を食べる害鳥」というレッテルを貼られることがあり
ますが、それはいささか気の毒なこと。彼らが本格的
に果実食になるのは収穫が終わった後で、木に取り
残された柿や落下したりんごを主に食べるのです。

そのムクドリのイメージが悪くなった原因のひとつ
に、彼らの持つ「群れる習性」が挙げられます。ムク
ドリは、繁殖の時期には番ごとに分散して子育てをし
ますが、それが終わった7月以後の夏から秋、冬と年
間の大半は、日中は農耕地や河原などに集まり群で過
ごし、夕方にはさらに大群となって集団で囀るを取
るという生活に変わります。その数は秋から冬の時季には
数千、稀に数万羽に及ぶこともあり、夕方、囀の上空
を大群が飛ぶ姿は、イワシの群が一斉に方向転換をし
ながら水中を泳ぐ姿によく似ています。



神社の境内にある大木の巣穴から顔を出す一羽。近くの木にはほかの番も営巣していた。木の洞で営巣するほか、人家の屋根裏・戸袋などの隙間や巣箱を利用する。繁殖期には「キュルキュル」「リヤーリヤー」と大声で鳴く。



農家が廃棄した柿やりんごに群がるムクドリ。鳥からすれば貴重な冬の餌場。喧嘩をする時間があるのなら、早く食べればいいのに、と思いつながら撮影。感染症対策が長く続いているため、鳥が群がる様子を「密」という言葉が頭に浮かぶ。

以前、ムクドリはその集団を郊外に取っていたのですが、最近では市街地、しかも駅前などの繁華街に取るようになり、その結果、時の下の道がたくさんの糞と抜けた羽根で汚れるという問題が生じています。また、ムクドリは時に入る前そして入った後もうるさい声で鳴くため、騒音の被害がある上に、市街地の夕空をムクドリの大群が巡回する様を不気味に感じる方も少なくないようです。

かつて私が観たムクドリの大集団が田園地帯の林に群入りする様子は壮観でした。大自然の中で聞く何万という鳥の羽音や鳴き声は、地響きに包まれているようで、不思議な感動さえ覚えました。しかし、賑やかに、コミュニケーションを取り合う様子に、「コミュニケーションは大事」などと気楽に言えたのも、自分の生活空間から離れたところであったからこそ。これが毎日、自分の家の近くで繰り返されているのであれば、話は違ってくると思います。

昔から人の生活に大きく依存することで栄えてきたムクドリは、人と適度な距離を保ってきたのですが、今や人は怖い存在ではなくなっていました。郊外に群を取るよりも、一晩中明るく、人や車の絶えない市街地の方が、夜行性のフクロウなどの天敵から身を守り、安全に夜を過ごせる場所であることを学んだのです。野鳥の大群と人とが一緒に暮らすことは決して両者にとって良い事ではありません。これ以上嫌われ者にならないうちに、郊外の方が安心・安全に夜を過ごせる場所なのだと、彼らに改めて学習してもらいたいものです。

秋に見るムクドリの大群は、里の豊かさを象徴するシンボルでした。いつかまた、大自然の中で、夕暮れ時の空を舞うムクドリの大集団を観ながら、あの不思議な音響効果のもたらす感動に浸りたいと思っています。そしてムクドリを「ありがたい存在」のだと、皆が改めて感じる日が来ることを願っております。相手が鳥であろうと、人であろうと、そのように思えるのが「理想的な共存の在り方」ではないでしょうか。